

ご感想、情報は・Eメール life@sankei.co.jp
・FAX 03・3270・2424

子供の風邪にも、大人同様に風邪薬や抗生物質が使われています。薬が使われ過ぎであることは、多くの人の意見が一致しています。しかし、「どいついつ時に使って、どいついつ時に使わないか」という使い方については、意見の一致を見ないのが現状です。

まず風邪薬について。子供が風邪の時に何も薬を使わない人はまれでしょう。鼻水が出れば鼻水止め、せきが出ればせき止め、熱が出れば解熱剤が当たり前のように処方さ

風邪の子供に薬どう使う

れます。鼻水やせきで苦しうな子供を放っておけないというのはその通りで、なんら異論はありません。

しかし、鼻水止めやせき止めの薬は、風邪を早く治さなればかりか、その場の症状に対してもあまり効果がなく、一方で副作用もあることが示されています。薬に効果があるから使うというよりは、医者や親が安心したために使っている面があり、薬を投与された子供は副作用で苦しむだけかもしれない。

アメリカ小児科学会は2歳未満の子供に「鼻水止め、せき止めを使ってはいけないうい、4歳未満にも「使うべきではない」と言っています。日本でも日本外来小児科学会が同様の主張をしています。

次に抗生物質について。乳幼児では風邪と思っていたら中耳炎や肺炎ということがよくあります。細菌性髄膜炎や化膿性関節炎、敗血症など重症の感染症のこともあります。「抗生物質でこうした病気を予防する必要がある」というのはなかなか説得力のある説明です。しかし、やはりアメリカ小児科学会は、風邪

家庭医が教える 病気のはなし

90

に抗生物質を使っても合併症や重症感染症が減ることは示されていません。一方、発疹や下痢など副作用の増加は明らかになっていきます。さらに大きな問題は、予防的に使われた抗生物質のために、重症感染症の原因となる菌が特定できなくなったり、抗生物質が効かない耐性菌が出現させたりすることです。

も減少しませんでした。乳幼児へのヒブ(インフルエンザ菌b型)や肺炎球菌のワクチンが普及したことによって激減しています。

繰り返しますが、熱が出ても、鼻水はひどいけれどもよくミルクを飲んでにこにこしている子供に、風邪薬や抗生物質を飲ませるのはやめた方がいいのです。子供を医者に連れて行き、「風邪です」と言われたら薬をもらわずに帰るのは、案外いい対応方法なのです。

武蔵国分寺公園 名郷直樹
クリニック院長

入学控えキャンペーン始動

急性アルコール中毒による若者の不幸な死を防ごうと、市民団体「イッキ飲み防止連絡協議会」が大学の入学時期を控え3月上旬、毎年恒例の「イッキ飲み・アルハラ(アルコールハラスメント)防止キャンペーン」をスタートさせた。今年このテーマは「空気」。

飲酒事故の背景には酒を飲む・飲ませることを当然としたり、たくさん飲めることをいいことだと考えたりする風潮がある。無言の強要」ともいうべき、飲まざるを得ない空気の危険性にみんなが気づき、変えていこうと呼び掛ける。

イッキ飲みの死を防ごう

「『空気』を読めと、飲まされて」をキャッチコピーにしたポスター。写真11万枚、チラシ86万5千枚を、飲酒事故の予防策を求めるとして、全国の大学726校に送るほか、一般の希望者にも配布する。また、初めての取り組みとして啓発動画を制作し、動画サイト「ユーチューブ」などを通じて配信する。従来実施している学生を対象にしたアルハラアンケートやアルハラエピソードの募集も引き続き行う。

協議会によると、昨年は全国で少なくとも3人の大学生がゼミやサークルのコンパで急性アルコール中毒になり命を落とした。うち1人は女子。過去3年間の死亡者は計12人に上っている。

協議会はイッキ飲みで大学生の子供を亡くした親が中心となって平成4年に設立され、毎年春のキャンペーンや、遺族による講演活動などを行っている。事務局はNPO法人「アルコール薬物問題全国市民協会(ASK)」内に置かれ、キャンペーンの詳細もASKのホームページ(<http://www.ask.or.jp/>)に掲載されている。



集散骨を考える
特自分らしい死装束
産経新聞出版
活本
ソナエ
終読
¥840+税